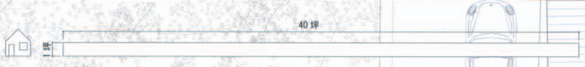
1×40 坪の帯



40 坪の使い方による、イエの作り方の一つの提案である。

思い描く敷地を探し、そこに家を物を建てる。ごく当たり前の建築行為のプロセスだが、東日本大震災において地域社会全体が破壊された現実は、その思想の根本を覆す事となった。復興住宅をどう供給していくか問われている中、プレハブ住宅や仮設アパートが空き地や駐車場などを利用して群を成して無作為に供給されている。それらは一時的な解決策に過ぎず、合理さ故の狭く単調な空間からの豊かさは皆無に等しく、赤の他人同士が全く未知の場所に生活強いられているその空間からは、地域社会との閉鎖感が醸し出されている。また、住宅建設に向けた土地取得が難しく、個人としても復興していく為の切っ掛けをつかめていない。
それらが浮き彫りとなった今、改めて住宅供給そのもののあり方を見つめ直す好機であると考えた。

限られた空間、未知の場所であることを肯定的に捉え、その場所に順応し偶然的に生じる帯型の 40 坪の使い方を提案する。

個としての 1.82m×1.82m の 1 坪を想定してみる。これを平面的に組み合わせノードとパスとして繋ぎ合わせる手法は、現在の一般的な住宅設計手法として用いられている。この手法では容積を持たない空間では自由度の高い空間を作ることが出来るが、限られた場所に置き換えるとその関係性の自由度は制限されてしまう。一方、1×40 坪のリニアな空間に置き換えると、長屋のような連続性を形成する。一見単調で一意的な空間にすぎないが、細く精錬された空間は外部空間と限りなく近く、全体を帯のように絡めその場所に据えることで、内部と内部、内部と外部、内外部と地域の新しい関係性が生まれ、それらの相互作用が発生する。

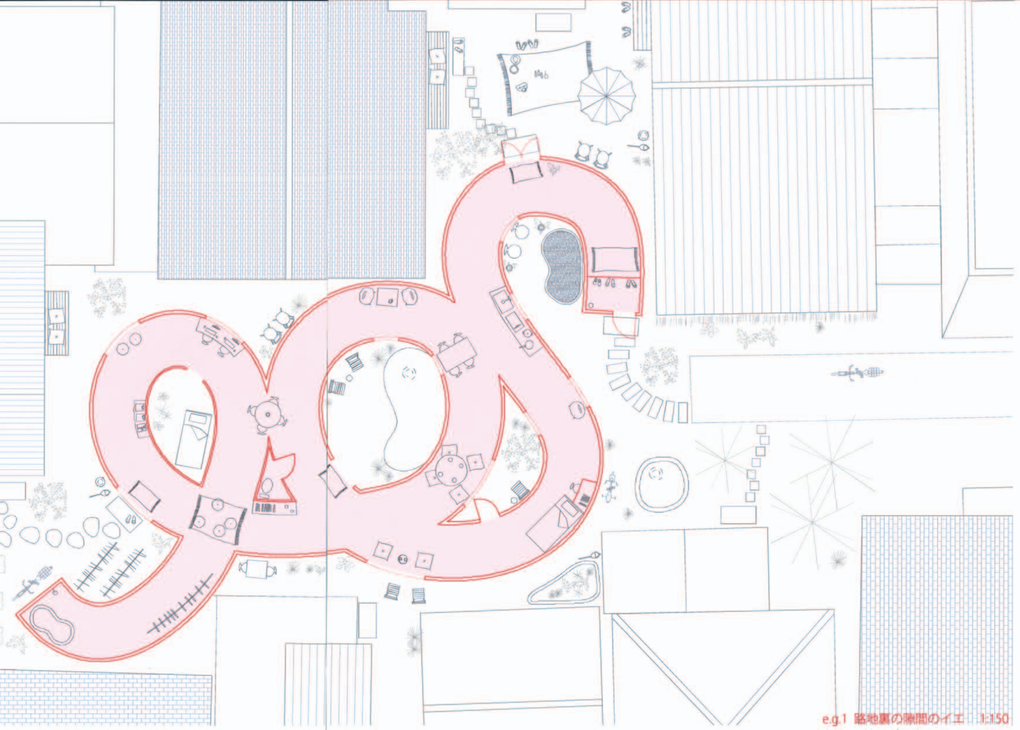
この 1×40 坪の帯は、家として使われるのか、シェアハウスか、あるいは復興住宅なのか。それは使う人、使う時、使う場所によって存在意義が変わるイエの形。一見狭く成立しにくいように見える空間であるが、長屋・極小住宅・路地裏等、日本人は「隙間」「狭さ」を生かすことに優れてきた。敷地形状、余白空間に合わせて「締める」「編む」「巻く」という日本のプリミティブな技法を計画手法として生かすことで、偶然的に発生する豊かな 40 坪を作り上げる。

個としての 1 坪

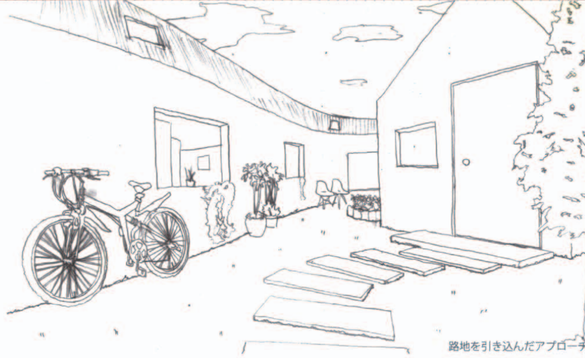
従来の個を繋ぐ多方向ネットワークによる 40 坪

長屋のような線状のネットワークによる 40 坪

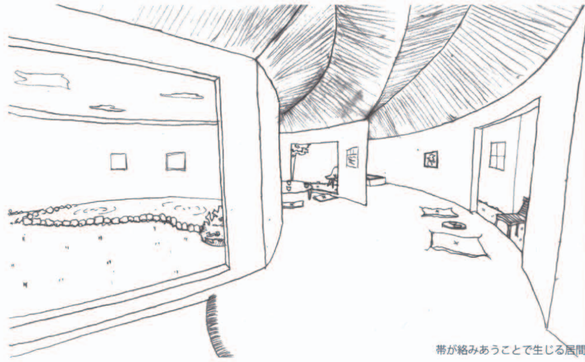
帯状の新しい有機的なネットワークによる 40 坪



e.g.1 路地裏の隙間のイエ 1:150



路地を引き込んだアプローチ



帯が絡みあうことで生じる風間